

原 著

当院における腹腔鏡下大腸切除症例の検討

石 部 敦 士, 山 岸 茂, 田 鍾 寛,
土 屋 伸 広, 佐 藤 渉, 田 中 優 作,
松 尾 憲 一, 簾 田 康一郎, 仲 野 明

藤沢市民病院 消化器外科

要 旨：目的：当院における腹腔鏡下大腸切除術の短期成績を開腹手術と比較し、安全性を検討する。
対象と方法：対象は2010年4月から2011年9月に、当院で待期手術を施行した大腸癌157例。腹腔鏡下手術症例（以下 LAC 群）85例（54%）と開腹手術症例（以下 OC 群）72例（46%）の短期成績について比較検討した。結果：出血量は LAC 群 5 ml と OC 群の208ml に比べて有意に低値であったが ($p < 0.001$)、手術時間は LAC 群が212分に対して OC 群が189分 ($p = 0.119$)、郭清リンパ節個数は LAC 群21個に対して OC 群19個 ($p = 0.39$) と差を認めなかった。術後食事開始日は LAC 群で術後3日目と OC 群の術後4日目に比べて有意に早かった ($p < 0.001$)。術後在院日数においても LAC 群で8日と OC 群の12日と比較して有意に低値であった ($p < 0.001$)。合併症発生率は、LAC 群で8例 (8.2%) であり OC 群の17例 (23.6%) と比較し有意に低値であった ($p = 0.017$)。縫合不全は LAC 群で1例 (1.2%)、OC 群5例 (6.9%) に認めた。LAC の開腹移行例は2例 (2.4%) であった。術死は認めなかった。結語：腹腔鏡下大腸切除術は短期成績において開腹手術に遜色ない結果であった。

Key words: 大腸癌 (Colorectal cancer), 腹腔鏡下手術 (Laparoscopy-assisted colectomy), 開腹手術 (Open colectomy), 短期成績 (Short-term outcome)